

現地フォーラム「BSEに負けないぞ！第1弾—放牧で牛乳を—放牧成功の必要条件—」

2. 北海道で放牧がなぜ衰退したのか

北海道立根釧農業試験場・湯藤健治

1. 北海道における牧草の作付けと生産利用状況 (H14 道酪農畜産課)

平成12年の牧草作付け面積467千㌦の内訳は、採草353千㌦、兼用59千㌦、放牧55千㌦であり、放牧専用面積割合は約12%にすぎない。

また、生産された牧草の利用仕向け状況では、乾草

28%、サイレージ66%、放牧その他6%となっている。一方、乳牛・肉牛飼養農家の放牧利用状況調査では、飼養農家13,410戸のうち放牧実施戸数は5,368戸を占めた。

2. 地域による粗飼料構造の違い

全道のサイレージ用とうもろこし作付け面積は35千㌦ (H12) あり、この生産量を加えて全道の粗飼料生産量となる。この原料草内訳は、GS10,998千㌦、乾草4,720千㌦、CS2,450千㌦、放牧その他1,050千㌦となっている。地域による違いを畑地型酪農・網走と草地型酪農・根室の比較で表1に示した。全道の動きと同様に両型ともグラスサイレージ化が進行する反面、

畑地型では乾草とコーンサイレージが、草地型では乾草と放牧が減少していた。

放牧はほぼ全域で減少傾向にあるが、急傾斜地が多い立地条件の酪農地帯や新酪のように牛舎近くに大きな団地の広がりを持つ地域・農家などでは、依然として春から秋にかけての重要な粗飼料として利用されている。

表1 牧草・飼料作物の生産利用順位 (単位：千㌦)

支庁	生産量順位	第一位		第二位		第三位		第四位	
	年次	H6	H12	H6	H12	H6	H12	H6	H12
網走 畑地型	利用区分	乾草	GS	CS	乾草	GS	CS	放牧	放牧
	生草生産量	804	990	694	588	566	488	48	68
	利用割合%	38	46	33	28	27	23	2	3
根室 草地型	利用区分生	GS	GS	乾草	乾草	放牧	放牧	CS	CS
	草生産量利用	2,555	2,991	643	426	475	259	13	12
	割合%	69	81	17	12	13	7	1	0
全道	利用区分生	-	GS	-	乾草	-	CS	-	放牧
	草生産量利用	-	10,998	-	4,720	-	2,450	-	1,050
	割合%	-	57	-	25	-	13	-	5

(道酪農畜産課資料より組み替え作成：原料草ベース)

3. 放牧に対する酪農家の意識 (H3根釧農試、H5天北農試)

<天北地域>

<根釧地域>

1) 今後、放牧を縮小又は廃止する理由

- | | |
|---------------|-------------|
| ①放牧地の管理が難しい | ①乳量にムラがある |
| ②草地面積に余裕がない | ②草地面積に余裕がない |
| ③緻密な飼養管理ができない | ③乳成分が低下する |
| ④手間がかかる | ④手間がかかる |
| ⑤乳成分が低下する | ⑤放牧の有利性が不明 |

2) 放牧を継続、拡大する理由

- ①低コストだから
- ②手間がかからない
- ③健康・繁殖によい
- ④草地面積に余裕がある
- ⑤高価な機械施設が不要
- ⑤粗飼料調製量が減らせる

3) 放牧を行っている理由

- ①省力化 (手間がかからない)
- ②牛のストレス解消
- ③乳量が向上する
- ④低コスト化
- ⑤草地面積に余裕がある

4. 放牧が衰退した要因

1) 放牧技術革新の遅れ

- ・ S36 農業基本法制定以降、酪農の機械化と規模拡大→放牧は省力化の手段
- ・ S50年代、高水分サイレージの普及、大型搭型サイロ建設と通年サイレージ化、輸入飼料を活用した高泌乳技術の導入→放牧は飼料設計から外れる
- ・ S60年代以降、海外の放牧情報、放牧研究の再開など新しい放牧技術の紹介→施設型酪農進行で後戻りできず→更にロールSなどサイレージ化の進展

2) 多頭化と放牧の立地条件

- ・ 放牧には、牛舎周辺にまとまった草地が必要。頭数規模の拡大にあわせて離農跡地や開バ事業の増反草地を徐々に増やしてきた結果、草地の分散、遠距離化が一般的となった。通常、経産牛60～70頭を超えて規模拡大を志向する場合、粗飼料調製の外部化・共同化を機に放牧を見直す事例が多い。

3) 放牧とストレス

- ・ 最近、北海道の夏は涼しくない。盛夏期の放牧を再考する農家もある。

5. 放牧導入、最近の傾向

- ・ 放牧酪農を目標にした新規参入者が増えている。
- ・ 後継者のいない「熟年」経営体の従来放牧から集約放牧への転換事例も。